

# 覚せい剤を乱用した少女たちのロールシャッハテスト

梅本 倅子

## Rorschach test of Juvenile Delinquents Who Abused Methamphetamine

Yoshiko UMEMOTO

**【要旨】**覚せい剤を乱用した少女たちのうち、覚せい剤の薬害により、中程度以上の症状が発現した人には覚せい剤の使用を中断しても猜疑的になったり被害感や関係念慮を持ちやすくなったりする人格上の変化を残すといわれる。そこで、覚せい剤を乱用し、猜疑的・被害的に物事を受け止める傾向が強く見られるようになり、さらに進んで幻覚や妄想などの精神症状を体験したことのある人たちと、覚せい剤を乱用はしたが、使用時に一過的に初期的な症状があったのみで、覚せい剤を使用中も中断後も大きな異状を示さなかったものを、断薬後おおむね1年を経過した時点でロールシャッハテストを実施し比較した。

その結果、覚せい剤の乱用により、中程度以上の影響を受けた人は、情緒的に不安定になりやすく感情統制が不良であること、対人関係に敏感で傷つきやすく、周囲と円滑な関係を持ちにくい傾向が見られた。

### はじめに

覚せい剤取締法違反が女性の犯罪・非行の中に占める割合は高く、同事犯で女子刑務所や女子少年院に収容されているものは、窃盗と並んで常に大きな割合を占めている。女子少年院では、昭和57年以後現在まで全収容者の20%以上を常に占めており、多いときには40%近くにまで達している。

覚せい剤取締法違反で検挙された人たちの推移を見ると、戦後間もなく軍から流出した薬物が乱用された時期と、昭和40年後半ころから徐々に増加し昭和57年をピークとする乱用期とがあり、現在も昭和57年ころに比較すれば減少してはいるが、それほど大きな変化はない。ただ、最近では、覚せい剤の使用方法が、静脈注射からいわゆる『あぶり』（ライター等で加熱しその煙を吸引するというもの）といわれるような吸引や錠剤を服用するという形に変化したこと、覚せい剤の入手販売ルートが暴力団を中心としたものから、路上での外国人などから購入する形に流通形態が変化したことなどの違いがある。したがって、以前は、覚せい剤の乱用者は、暴力団と接点を持つ人に多かったが、最近では誰でも比較的手軽に入手できるようになり、乱用者が一般化してきていて現在でも大きな社会問題

であり続けている。

覚せい剤の薬理作用は薬物使用の期間が長期化するとともに次第に変化するといわれる。初期には「眠気が消えて頭がさえる」「物事に集中できる」「痛みや不快感が取れる」「自信がついて活動的になる」「性感が高まる」「痩せられる」「几帳面になり、きれい好きになる」「時間がすぐに経って退屈しない」等々といったものである。少年院に収容されてきた少女たちに乱用し始めた動機を聞くと、上記のような効用を聞かされ、誘われて好奇心から乱用を開始しているものが多い。中でも、「痩せられる」「痛みや不快感が取れる」「自信がついて活動的になる」といった効果を聞いてその気になったというものが多い。中には気持ち良くなるというのでやってみたが何の変化もなかったというものもいるが、初期の薬効に引かれて、使用を継続していると、間もなく猜疑的になり、些細なことで自分の悪口を言われる、周囲が何かたくらんでいるように思われるなどと受け止めやすくなり、周囲の人たちとのトラブルを招くことが多くなる。さらに進むと、幻覚や被害妄想など統合失調症と区別がつかないような症状を生じる。また、感情の統制が不良となり、いらいらと落ち着かずリストカットや衝動的

な暴力行為等が見られるようになることも多い。

また、覚せい剤乱用の特徴として、薬物を使い続けると最初に得られたような効果を得るためには、徐々に使用量を増加させなければならなくなる耐性の形成と、反対に一度使用を中止し、症状がなくなっているも、薬物の使用を再開するとすぐに、以前の症状が発現するようになる逆耐性が存在することが知られている。それに加えて、環境的なストレスやアルコールの飲用などを契機として症状が再発するいわゆるフラッシュバック現象があることもよく知られている。

こうしたことから、覚せい剤を乱用すると脳に機能的な変化が起り、中程度以上の乱用を行った人は、薬物の使用を中止しても、物事を被害的に受け止めたり、対人関係において猜疑的になったりという人格的な変化が生じていて薬物を中断後にもその影響は持続するともいわれている。

ところで、女子少年院には、家庭裁判所で少年院送致の決定を受けた14歳から20歳未満の少女たちが収容されてくる。年齢的にも若年で、覚せい剤の乱用を始めてからあまり時間の経っていないものが多いのであるが、上記に記載した中程度からさらに進んだ症状を体験した少女たちもいる。その多くは、3ヶ月から1年くらいに渡り使用していたという。どのくらいの期間乱用するとこうした重篤な症状を呈するようになるのかは、個人差が大きく人によって差があるようであるが、刑務所に収容されている成人の使用期間とその症状の時間的な経過について調査し比較すると、少女たちのほうが影響を受けやすいような印象を受ける。発達途上にある若年者のほうに、その影響は早期に出てくるのであろう。成人に比して、短期間で異常な体験をしている少女に会うことが多い。

一般の少年院に入院してくる少女たちは、警察での取調べ期間を経て、少年鑑別所に収容され、そこで審判まで3週間前後の期間を過ごしてから入院してくるので、覚せい剤の使用を中断してからおおむね1ヶ月程度は経過していることや覚せい剤による中毒性精神病と診断されて医療的な治療が必要であると判断されたものは医療少年院に送致されることなどの理由から、一般少年院に入院してくるほとんどのものは、入院の時点では明確な自覚症状を訴えることは少ない。しかし、少年院に収容中に拘禁によるストレスや集団生活の中で生じる同僚間のトラブルなどを契機としていわゆるフラッシュバックと思われる症状の再燃が見られることはしばしばである。

また、少年鑑別所に収容された時点では、覚せい剤を中断してから間がないことと不規則で不健康な生活を続けていたことなどがあいまって、数日間眠ってばかりいる者や多量の食事をするもの、逆にほとんど摂食しないもの、部屋のごみや汚れを執拗に気にするもの、落ち着きがなくいつもいらいらとしているもの、幻視や幻聴があり不穏な言動を示すもの、周囲から危害を加えられるとおびえ、警察に保護を求めて逮捕され、同じような症状が継続している者等いろいろな状況のものが見られる。

## 1 目的

上記の通り、覚せい剤の影響が中程度以上になると、その後は、脳の機能的な変化が起り、人格上にも回復が困難な影響が残るといわれる。そこで、おおむね半年から1年程度、覚せい剤を乱用したが、初期症状のみであったものと、中程度以上の影響が現れていたと考えられ、猜疑心や関係念慮、幻覚や妄想を体験したものととの間に、何らかの人格上の差が生じていないかを検討してみることにした。ロールシャッハテスト上のどのようなところに覚せい剤の影響が現れるのか、それを知ることによって、少女たちの予後を予測するうえで役立てられないか検討したい。

## 2 方法

少年院に収容される以前に、おおむね6月から1年程度覚せい剤の乱用期間がある少女に（使用頻度は明確ではない。1日に複数回にわたり使用したものから、1週間に2-3回程度といったものまでである。）おおむね1年近く、少年院で教育処遇を受け仮退院のめどがついた時点でロールシャッハテスト（以後ローテストと記載する）を実施した。したがって、ローテストを実施した時点では、覚せい剤の使用は1年近く中断している。少年院での生活は安定し、ローテストを実施した時点で妄想・幻覚などの症状はない。

覚せい剤を乱用したが、初期症状のみを体験しているものと中程度以上の症状を体験したものを2つのグループに分け、グループ間のローテスト結果を比較する。

ローテストは阪大法により実施し整理を行った。

実施期間は昭和56年から昭和59年にかけて覚せい剤取締法違反で少年院送致の決定を受けた少女たちである。（資料は古いものではあるが、現在でも多くの覚せい剤乱用者があり、まとめる機会を逸していた資料を整理することに多少の意義はあるのではないかと考えて

まとめることにした。)

### 3 対象者

知能は少年院に入院前に少年鑑別所で実施した田中B式知能検査で、IQ=80以上のものである。

年齢は15歳-20歳の少女たちである。

#### A群：15名 (No.1-15)

少年院に入院以前、覚せい剤の乱用中に中程度以上の症状と思われる猜疑的な言動や被害的な受け止め方が見られ、そのために周囲とトラブルを多発していたことが判明しているものと、幻覚・妄想などの精神症状を示したことのあるものをあわせてA群とした。そのうちNo.8-15の8名は、少年院に収容期間中に拘禁によるストレスや同僚との集団生活の中でのトラブルを契機に、以前の症状と類似した症状を発症して、専門医の治療を受けたもの、自傷、衝動的な暴力行為があり、いらいらとして落ち着かず不穏な状況になり、いわゆるフラッシュバック現象が見られた少女たちである。

#### B群：16名 (No.21-36)

A群同様に、少年院に収容される以前に6月から1年程度の覚せい剤の乱用経験はあるが、初期の一過的な症状のみしか体験しなかったとっているものか、覚せい剤を乱用はしたが、何の変化も感じなかったという少女で、少年院に収容後にも、覚せい剤の影響と思われるような症状は見られなかったものである。

A群の少女たちもB群の少女たちも、覚せい剤を使用するように誘われ、その誘いに乗って乱用をしているという意味で、薬物への親和性は同様に認められる。また、家庭環境や生活環境・生育歴に恵まれていないことなどは、両群とも共通している。

### 4 結果

表1は、A群15名のローテストの結果、表2はB群の結果をまとめたものである。

ローテストで、人格上の特徴などを見ていこうとするときグループにまとめたのではその特徴がなかなか浮かび上がってきにくいことが予測される。また、人数的にも1グループが15人と少数であり、統計的な比較にどれだけ意味があるか問題はあるが、この2グループを比較するといくつかの特徴が見られるように思われる。

#### (1) テスト状況について

少年院に送致されてから、おおむね1年を経過し、

仮退院のめどが立った時期に実施している。検査者は1年間いろいろな機会に少女たちと接触しており顔なじみである。こうしたこともあって、検査には全員協力的であった。

また、入院前に少年鑑別所でローテストを受けているものもあり、ローテストを受けるのが初めてではないものも数名いる。

#### (2) 反応数について、

A群の平均反応数は38.4、B群は28.3である。

一般の人と非行少年のローテストを比較すると、非行少年のローテストの反応は少ないといわれる。市村によると女子非行少年の平均反応数は22.4となっている。また、多くの研究結果を見ると、一般成人の反応数はおおむね20から45の間に入るといわれ、先の市村の一般群の平均反応数は23.1となっている。一般の平均とされる反応数を23とすると、それ以下のものはA群では2名、B群では5名のみである。一方、反応数が40を超えるものが、A群で5例、B群で2例見られる。こうしたことをあわせ考えると、A群・B群ともに、反応数はかなり多いといえる。特にA群の反応数の多さが目立つ。

こうした結果は、検査者と被験者との関係が1年近く生活の場をともにしてきていて親しく、テストに協力的であったことが影響していると考えられる。

非行少年のローテストの多くが、家庭裁判所や少年鑑別所において、審判を前にし、かなりの緊張を強いられ、防衛的な構えが強い状況で行われているのに対して、今回は、十分に気心の知れた間で、テストに協力しようとの構えがあったことが、反応数を増加させる一因になっていることが考えられるが、それを考慮しても、反応数の多さは特徴的である。

反応の失敗や反応拒否を示したものはなかった。

ローテストに取り組んでいる少女たちの様子を見ると、特にA群では、落ち着いてじっくりと検査に取り組むことができず、十分に慎重に検討しないままおもしろいことをなんでも次々と反応してくるという印象が強かった。いずれにしても反応数は、一般の非行少年<B群<A群ということがいえそうである。

#### (3) 反応領域について

A群のW%は44%、B群は48%である。阪大法によると一般成人のW%は26.8%である。一般に日本人はW%が高いといわれ、高橋や市村によると非行少女のW%は45%となっている。A群とB群の差はあまりないが、反応数の多さを考えると、一般の人たちと比較

して、両群のW%はともに高めであるといえる。

W反応は成人よりも子どもに多く、小学3年生頃まで徐々に減少し、一度減少したW反応は、精神疾患や老齢になるにつれて再度高くなる傾向があるといわれる。また、発達的に見てゆくと漠然としたW反応から、徐々に質的に良好なD反応が増加してゆき、その後に、よく統合されたW反応が見られるようになるという。漠然としたW反応を示していたものが、図版と現実との適合性を検討し、分析的客観的に物事を見てゆけるようになるにつれて、良好なD反応が増加し、その後に、再度とD反応を統合した良質のW反応が得られるようになる。こうしたことを考えると、W%の高さは未分化な状態か退行的な傾向を示すといえる。また、W%の高さは場を分析的に見ることができず、状況に依存しやすいことを示しているのかもしれない。また、非行少年たちのW%の高さは欲求水準が高く、顕示的な傾向の人に見られるともいわれている。

両群ともに反応の継起の乱れ、 $d\% \cdot Dd\% \cdot S\%$  などにおいて特に差はない。一般のものと比較しても特に特徴として挙げられるようなことはないように思う。

#### (4) 決定因について

- ① 運動反応の平均値は、一般成人で $M=3.3$   $FM=3.3$  (12歳児では $M=1.38$   $FM=1.35$ )と比較すると、多くはないが $M \cdot FM$ ともに非行少年一般よりも多いように思われる。特にA群ではその傾向が強いといえる。
- ② A群とB群を比較すると $FM \cdot M$ ともにA群のほうが多い傾向が見られる。
- ③ 両群とも一般非行少年と同様に、内的な統制は不良で、 $M < FM$ である。
- ④ カラー反応についてみると一般成人では $FC=3.7$   $CF=2.1$   $C=0.2$ となっている。(12歳児では $FC=1.61$   $CF=1.11$   $C/F=0.46$ ) 発達的に見ると、おおむね小学校3年生くらいのところで、 $FC > CF$ となるとされているが、A群・B群ともに $FC < CF$ で外的統制は不良であるといえる。この傾向はB群よりもA群において強く見られる。また、A群は一般の非行少年に比して、カラー反応が多い傾向がある。
- ⑤ F%はA群では66.1% B群は71.9%で B群のほうが高めである。正常成人のF%が58.5% (12歳児F%=68%)でありA群B群ともに高めで、特にB群において高い。
- ⑥ A群は $M:C=2.3:5.7$

B群は $M:C=1.4:3.5$ となりCが優位であり、A群のほうがその傾向が強い。

こうしたことを総合すると、A群B群ともに、情緒面で感情統制が不良で、混乱を生じやすく、そうした感情を容易に行動化して攻撃的・敵対的な行動や衝動的な行動が多くなるのが十分に考えられる。特にA群ではその傾向が強いことがうかがえる。

- ⑦ 陰影反応・黒白反応などでも、A群のほうが、B群に比して反応数が多い。

#### (5) フォームレベルについて

- ① F(+)%は正常成人で74.1%であるが、A群では73.8%、B群では76.5%であり大きな差は見られない。
- ② F(-)%はA群のほうが高く、F(+)%はB群のほうが高めである。

A群のほうが独断的で不適當な判断をする傾向が強く失敗反応が多くなりがちであることが予測される。

#### (6) 反応内容について

- ① 両群とも、一般成人に比較してH反応が多い、特にA群では(H)がかなり多い。A群の(H)は、幽霊・魔法使い・お化け・悪魔・鬼・宇宙人・天使・神様などである。一方B群の(H)の内容は幽霊・悪魔というのもあるが、インベーダー・銅像・イラストで書いた人といったものである。
- ② 両群とも、fire・ant・foodといった反応が多発している。特にA群において、fire・Ant反応が目立ち、B群ではLds・arch・rock・cloudなどの反応が多く、こうした反応がF(±)を多くしている。これらをまとめてみると、一般成人と比較すると両群ともに対人関係に敏感で、不適応感や違和感を持ちやすく、傷つき易い傾向があり、対人場面において距離を置きやすいこと、周囲を気味の悪いものと受け止めやすいことがうかがわれる。情緒的な統制や衝動の統制が不良で、敵対的、攻撃的な傾向がうかがえる。以上の傾向は特にA群において顕著である。

#### (7) 文章型

成人においては文章型は $AS < CS$ になることが一般的であるが、A群B群ともにASが優位である。ASは簡単に、反応と実際のものと同じである事を断言していくものであるのに対して、CSは反応と実際のものとは別のものであるという客観的で批判的な見方が

踏まえられており、発達的に見てもASからCSが優位になっていくといわれる。

(8) その他 (org, sp.)

org, sp.ともにあまり良質なものは出ていないが、(-)になるような不適切なものは両群ともに見られない。

以上のようなローテストの特徴を踏まえて、A群B群それぞれの群の平均的な人格像を見てゆくことにしたい。

A群の特徴を挙げると、反応数が多い。W%がやや高めである。運動反応は一般の成人と比較してそれほど差はない。しかし、FM>Mであり、内的な統制は不良である。色彩反応は多く、情緒的刺激に対する感受性は認められるが、CF>FCで統制は不良である。M:C=2.3:5.7であり、大きく外向形に傾いている。しかも、反応内容に fire blood food Ant 反応が多いことを見ると、情緒的に非常に不安定で、内的にも外的にも統制は不良であり、衝動的な行動や敵対的・攻撃的な行動化が容易に起こることが予測される。

また、反応内容を見ると、H(H)が多く、その内容も妖怪・幽霊・悪魔・お化け・魔法使いなどであり、対人関係において、傷つき易く、現実生活において不適応を感じやすいことが伺える。さらに、対人関係を不可解なものとして受け止める傾向があるのではないだろうか。

不適格な認知の行うところもあり、F(-)%は高い。また、発達的に見ると、Wの多さ、AS>CS food反応などから見て、全般的には未分化・未熟さや退行的になりやすい傾向があるといえそうである。知的には特に問題となることはないが、外界からの刺激に振り回されやすく、落ち着いてよりよい解決方法を模索してゆくことができにくいことが伺える。

こうして見ると、少年院の生活になじみ、少年院という場になれてきたことによって、一応の適応と安定を得たとしても、新しい場に直面すると、周囲を敵対的に受け止め、被害的になって、攻撃的な行動や衝動的な行動化が行われやすいことが予測される。対人関係においても不適応感を抱きやすく、信頼感や適応的な関係を樹立することは困難が予測される。

B群の特徴を挙げると、FM>M FC<CF+CF+C M:C=1.4:3.5とA群や非行少年一般と同様の傾向を示し、内的な統制も外的な統制も不良であるし、外界の刺激を統制する力は弱く、情緒的な刺激に振り回されやすいところは見られるが、A群と比較すると、その程度はずいぶん軽微であるといえる。独善的で不適切なF(-)反応にまで反応のレベルが落ちることは少

なく、F(±)のレベルで収まっている。反応内容も、fire Blood Ant food反応はあるが、A群に比してその数はかなり少ない。そのかわりにLds arch Na cloudなどといった反応が多くなっている。H反応(H)反応は、A群に比して減少し、対人関係に対する過敏さはそれほど見られない。また、情緒的な刺激に対しても、強い攻撃性や衝動性は少ないといえる。

一応少年院での教育処遇を受け、院内生活を見るだけでは両群の差はないように見えるが、2群のローテストを比較してみると、A群の人たちは社会内処遇に移行した後、十分な環境調整と支援がない場合には社会適応はかなり困難であることが予測される結果となった。

A・B群31名の中には、少年院入院直後にローテストを実施したものが4例あった。数的に少なく、はっきりしたことはいえないが、薬物を中断した直後と、おおむね1年間断薬した後のものを比較すると、反応数が減少し、同時にM・FMといった運動反応が減少し、それから後に色彩反応が減少していているようであった。それに伴って、F%が上昇し、ローテスト全体に収斂傾向が見られるように思われる。

W%の高さ、AS>CS food反応 org(h)やsp.(+)の少なさなどは非行少年に共通して見られる未分化さ未熟さ、物事を分析的・客観的に見てゆくことの困難さを示しているといえるが、運動反応や色彩反応、(H)の反応内容には、覚せい剤の影響が反映されているのではないかと思われる。

A群においては、覚せい剤の乱用者に特徴的に現れるといわれる対人関係における過敏さ、猜疑的になり被害感を抱きやすくなるという特徴が、薬物を中断して1年近く経過した後にも残っているということができるといえるのではないかと考えられる。

また、B群がいろいろな意味で、一般の非行少年とA群との中間の特徴を示していることは興味のあることである。

## 5 今後の課題

今回は、覚せい剤の乱用の程度によって生じる影響の違いを、グループ化することによって検討してきたが、今後は事例の検討も行ってゆきたい。

## 参考文献

覚せい剤中毒、山下 格・森田昭之助 編、金剛出版、1980年

覚せい剤・有機溶剤中毒、島菌安雄・保崎秀夫 編、  
金原出版、1982年

覚せい剤精神病、佐藤光源・柏原健一、金剛出版、  
1986年

覚せい剤精神病と麻薬依存、佐藤光源・桜井映子、東  
北大学出版会、2004年

ロールシャッハテスト、市村 潤、新書館、1964年

ロールシャッハ解釈法、高橋雅春、牧書店、1964年  
境界例ロールシャッハテストと精神療法、馬場礼子、  
岩崎学術出版社、1981年

ロールシャッハ検査法、辻 悟、金子書房、1997年  
境界例非行少年のロールシャッハ研究、藤田裕司、犯  
罪心理学研究 Vol.24 No.1

覚せい剤を乱用した少女たちのロールシャッハテスト

表1 A群

No	R	W	D	d	Dd	S	M	FM	m	F	Fe	cF	FC	CF	C/F	G	F(±)	F(-)	h	l	n	sp(+)	A	Ad	H	Hd	Plt	obj	others	OS	AS			
1	21	19	2			1	2	2	11	1	2	4	4	3	1	16	2	3	4	4	12	9	7(3)	1	1	1	1	mask	fire	Lds	1	8	13	
2	18	10	6	2		4	2	1	12	1	1	2	1	2	1	14	4	4	1	1	7	8	4	3(1)	2	1	1	1	fire			18		
3	44	15	29				1	3	31	1	1	3	2	4	1	33	6	5	3	17	21	5	7(3)	6	1	6	1	Lds	fire2		1	43		
4	37	21	13	1		3	11	3	13	4	1	3	2	5	6	32	2	3	2	7	2	2	23	11	4	11	2	7	3	fire	Na	1	18	19
5	34	28	6			2	4	2	24	1	1	1	1	3		21	3	10	2	3	1	2	10	16	5	6(2)	1	4	fire	Na		34		
6	45	11	24	1	7	3	1	8	33	4	1	1	1	3		35	3	7	3	7	1	18	21	4	4(4)	8	1	2	Ant	arch	map2	22	23	
7	33	25	7			2	1	2	18	1	1	1	9	2		26	7	7	1	2	1	2	19	10	5	6	2	mask	fire 2	Food	7	6	27	
8	67	21	31	6	4	3	2	2	1	56	1	2	3	3		49	2	16	1	7	17	30	12	11(4)	3	6	blood	x-ray		4	12	55		
9	34	22	12			1	3	2	19	3	2	1	6	2		19	12	3			14	2	5(2)	1	4	2	fire 2	exp 2		4	27	7		
10	49	14	26	1	8		5	2	29	3	4	2	6	2		33	13	3	1		21	3		1	2	6	Ant 8	fire 2	Food	7	2	47		
11	56	23	24	5	3	3	5	4	1	34	2	1	7	2		38	9	9	1	1	16	25	1	6(3)	4	3	Ant 5	fire 2	mask 2	5	2	54		
12	40	14	22			2	2	1	1	24			3	9	1	28	11	1	1	1	4	13	11	4	5(1)	1	6	4	arch	fire/exp	Blood 2	4	9	31
13	34	21	12			1	3	4	25	2	1	3	1	1		23	1	10	3	4	1	11	18	4	7(5)	2	2	Ant	Food		11	23		
14	32	8	22	1	1	1	1	2	23	3	1	1	2	2		27	2	3	2	2	9	20	1	6	1	6	1	testLead			22	10		
15	32	2	23	4	3	1	2	2	29	1	1	2	1	2		31	1	1	1	2	3	8	6(3)	4	1	5	Ant2	fire2	Rocket2	2	3	29		
合計	576	254	259	21	29	24	35	42	9	381	26	10	17	27	57	15	0	425	74	77	6	32	27	12	175	243	48	84(31)	35	40	37	35	143	433
平均	38.4	16.9	17.3	1.4	1.9	1.6	2.3	2.8	25.4	1.7	0.7	1.1	1.8	3.8	1		28.3	4.9	5.1	0.4	2.1	1.8	0.8	11.7	16.2	3.2	5.6	2.3	2.7	2.5	2.3	24.8	75.2	
%			44.1						66.1									73.8	12.8	13.4														

fire 16 mask 4  
 blood 5 Lds 5  
 Ant 17  
 exp 5  
 food 4

表 2 日 群

No	R	W	D	d	Dd	S	M	FM	m	F	Fc	cF	FC	CF	C/F	C	F(+)	F(±)	F(-)	h	l	n	sp(+)	sp(±)	A	Ad	H	Hd	Pt	obj	others	AS	CS	
21	21	6	15				1	1	18	1	1	1	1	1	1	1	19	4	2	1	1	2	17	1	1	1	1			1	5	16		
22	18	15	3				1	1	11	1	1	1	1	2	1	13	4	1	1	1	1	5	6	2	3	2	3	2	3	2	2	4	7	11
23	29	12	15			2	2	6	19	1	1	1	1	1	1	23	1	5	2	1	11	12	2	7	2	4	2	arch	rock 2	4	7	25		
24	36	16	19			1	4	1	29	1	1	1	3	4	1	29	5	2	2	4	1	5	18	2	4	4	3 Na 3	rock 2	22	3	36			
25	25	11	14				4	1	15	2	1	1	1	1	1	21	2	2	2	3	2	1	6	13	5	5	1	2	2 mask	fire food	22	3		
26	48	11	27			4	1		40	1	1	1	2	1	1	39	4	5	4	1	6	25	5	3	5	2 Lds 2	sex Na	4	1	47				
27	25	6	19				2	2	25	1	1	1	1	1	1	20	1	4	1	1	19	2	2	2	2	Lds arch		2	2	23				
28	14	3	9			1	2	3	14	1	1	1	1	1	1	13	1	1	1	1	8	8	2	2	3	Ant		3	14	14				
29	27	20	7				3	3	17	1	1	1	1	5	2	21	5	1	1	1	8	2	1	15	11	5	2	1 Na arch	fire Blood	1	5	22		
30	33	20	10			3	1	2	20	1	3	6	1	4	1	21	11	1	1	1	1	1	15	11	1	3	1	3 Lds arch	fire Blood	4	33	33		
31	28	14	13				2	1	17	1	2	1	1	3	2	22	6	1	1	4	2	1	12	14	2	3	1	1	And3 food	1	25	3		
32	18	12	6				2	3	9	2	1	1	1	3	1	17	1	1	1	3	2	2	9	13	3	3	1	1	1	11	7	7		
33	62	14	27			8	2	1	52	1	1	2	1	5	1	40	15	7	1	1	2	7	9	14	8	1	6	9	5 arch	Food roch	10	53	9	
34	24	21	2			1	2	1	12	1	1	1	3	5	3	13	10	1	1	2	2	14	9	2	1	1	6 Blood	art 2	Ant	2	17	7		
35	24	20	4				2	3	3	2	18	1	1	1	1	17	4	3	3	1	9	9	3	3	1	3	1	1	Lds 2	arch	exp	1	4	20
36	20	16	4				2	6	9	9	9	9	9	4	1	18	2	1	1	7	1	3	10	11	3	3	2	map	fire	5	15	15		
合計	452	217	194			17	23	30	4	325	11	12	13	12	40	9	346	71	35	1	36	15	14	127	205	25	56	9	22	40	32	30	161	291
平均	28.5	13.6	12.9			1.1	1.4	1.9	20.3	0.7	0.8	0.8	0.8	2.5	0.6	21.6	4.4	2.2	2.3	1	2.3	1.4	7.9	12.8	3.6	1.4	2.5	2			35.6	64.4	64.4	
%	48	42.9					71.9									78.5	15.7	7.7					45.1											

fire 2 mask 1  
blood 3 Lds 6  
Ant 5 arch 7  
exp 1 Na 11  
food 2